



柑橘(かんきつ)という言葉は、みかんやオレンジ、レモンなど幅広い果実を表わしますが、江戸時代(1706年)に井田昌胖(いだまさなお)が「柑橘伝」の中で使ったことに始まり、英語の Citrus Fruits に対する日本語として現在に至っています。

この言葉、よく見ると二つの柑橘から来ています。柑は柑子(こうじ)を表わし、橘(きつ)は橘(たちばな)を表わしています。どちらも、今ではあまり姿を見かけない柑橘ですが、なぜ、この二つの柑橘が選ばれたのか、その歴史を訪ねながら考えてみます。

[橘の花]

橘(たちばな)は、九州から東海にかけての沿岸に自生する柑橘の一種です。果実は2~3センチと小さく、酸味が強くて食用にはなりません。初夏に白い花が咲き、5弁の花は文化勲章のデザインに使われています。このデザインには、当初、桜の花が候補とされていましたが、昭和天皇の「京都御所には左近の桜と右近の橘があり、文化人には武を表わす桜より、永遠を表わす橘の方がふさわしい」とのお考えで決まったといわれています。



柑橘の花

その白い花と芳しい香りは「はなたちばな」の名で親しまれ、『五月(さつき)まつ 花橘(はなたちばな)の香をかげば 昔の人の袖の香ぞする』(よみ人知らず)と花の香りを歌に詠み、清少納言が『雨のあとの早朝に 白い花の中に黄金の玉のように見える花芯はじつに鮮やか』と花を愛でたように、人々は橘の実ではなく、花にひかれたようです。

[橘と聖武天皇]

橘は人の姓にもよく見られます。かつて愛媛には、伊予橘氏と呼ばれる一統がいました。平安時代に、新居(にい)や宇摩(うま)地方で勢力を広げた越智実遠が、伊予の国司、橘清正から橘姓をもらって名乗るようになり、のちに天慶の乱をおこした藤原純友(すみとも)を捕らえ、宇和郡を領した橘遠保もその一統です。

その橘姓は、聖武天皇が736年に葛城王(かつらぎのおおきみ)に与えたことに始まるといわれています。天皇は『橘は果物の長者で、人々に好まれるもの』と優れた橘にたとえて葛城王を褒め、橘の姓を与えて次の歌も詠まれています。

「橘は実さえ 花さえ その葉さえ 枝に霜(しも)ふれど 益常葉の樹(いやとこはのき)」
(たちばなは、その実も花も葉にも、そのうえ枝に霜がおりても、常に緑を保つすばらしい樹)

ただ、続日本書紀には、葛城王が『母である
県犬養（あがたのいぬかいの）三千代が、元明天皇
から橘を浮かべた盃とともに橘姓を賜った』と
述べており、始祖は母の三千代とするのが正しい
ようです。三千代は、時の権力者である藤原不比
等の妻であり、聖武天皇の後である光明子の母で
もあり、前夫との間にもうけた子が葛城王という
宮廷でも抜きん出た存在だったのでしょう。



聖武天皇にとって葛城王は妻の異父兄にあたり、
その後、橘諸兄（たちばなのもろえ）と名を改めて左大臣まで昇り、聖武天皇を支えたのです。（上
写真：橘）

ところで、聖武天皇が称えた橘は、果物の中で最も優れていたようですが、卑弥呼の時代に『倭人は 橘があっても 賞味することを知らない』と中国の使者に言われたことを思うと、隔世の感があります。当時の橘は柑橘類の総称だったので、種類までは特定しづらいのですが、桃や柿、栗などに比べても優れたとすれば、甘くおいしかったはず。柑橘は、主に乾燥させて薬用に使われていたことから、それまでの常識を越える果物だったのでしょう。

〔柑子の色〕

柑子（こうじ）は、比較的寒さに強く、山間部や積雪地域にも植わっていましたが。果実は濃い黄色の 40 ㍉ほどの小果ですが、最近では姿を見かけなくなっています。

日本の伝統色には、柑子の果実の色を表わした「柑子色」という、少しくすんだ黄橙色があります。染色では、梔子（くちなし）で染めた上に紅花を重ね染めしますが、蘇芳（すおう）に梔子を重ねることもあり、更に、二色の薄い絹を重ね合わせる「かさねめ」には、表朽葉（おもてくちば）に裏黄（うらぎ）の柑子襲（かさねめ）があります。人々の関心は、柑子の花ではなく果実に集まっていたようです。

〔柑子と聖武天皇〕

柑子は聖武天皇の時代に唐から伝わっています。「続日本書紀」には『播磨直弟兄（はりまのあた）い おとえ）が初めて唐の国から柑子を持ち帰り、左味朝臣虫麻呂（さみのあそん むしまろ）がその種を植えて実を結んだことから、二人はその功績によって従五位下に叙せられた』とあります。

遣唐使が盛んに唐の文化や知識を運んでいた頃であり、聖武天皇が即位された翌年のこと。地方の豪族や官僚が、内裏に昇る五位の殿上人に昇進したわけですから、柑子の導入と栽培はよほどの功績だったのでしょう。

柑子の『柑』は、木偏に甘いと表わされるように、甘く美味しい果実だったはず。とすると聖武天皇が称えた橘は、柑子を指したものではなかったかと思えるのです。



柑子

[名の由来]

ところで、柑子は果実と一緒に呼び名も伝わったので、日本古来の和名や由来は見あたりませんが、橘には興味ぶかい由来が残されているので、少し紹介します。

橘の花をみると、花卉を支える軸の部分が短く、花が立っているように見えるため、立ち花と呼ばれるようになったという説があります。

また、日本書紀に登場する田道間守(たじまのもり)が、常世(とこよ)の国から持ち帰った非時香菓(ときじくのかぐのみ)の種をまいたところ花が咲き、その花を「たじまばな」と呼んでいるうち、訛って「たちばな」になったという説もあります。

このほか、神主が奏上する祓詞(はらえことば)に

「かけまくも かしこき伊邪那岐大神(いざなぎのおおかみ) 筑紫の日向の橘の小戸(たちばなのおど)の阿波岐原(あわぎがはら)に 禊祓え(みそぎはらえ)給えし時に…」というくだりがあります。

同じ文言は古事記の中にもあり、イザナギが黄泉(よみ)の国の穢れ(けがれ)を落とすため、九州の日向の国の橘という地でみそぎを行い、天照大神やツクヨミ、スサノオなどの神々を産んだと記されています。橘の「たち」は、立ち現れるの「たち」であり、神霊が立ち現れる花を「たち花」とよび、橘の木が植わり、穢をはらう神聖な場所を「たちばな」と呼んだという見方もあります。

橘は、冬でも葉を落とすことのない常緑樹のため、永遠につながる縁起の良い樹とされ、京都御所に植えられています。穢れをはらう神聖な場所にふさわしい樹であったとしても、それはそれで一理あるように思えます。いずれにしても、橘は神代の時代から日本にあった柑橘だからこそ、あべたちばな(橙)やひめたちばな(金柑)、からたちばな(カラタチ)などと、その後に入った柑橘にも「たちばな」の名をつけたのでしょう。

[橘も柑子も蜜柑]

柑橘全体を「たちばな」と呼んだ時代や、柑子を橘と呼んだ時代もありますが、甘いみかんの種類が増えるにしたがって、更に呼び名が混乱してきます。

江戸時代には、橘と書いて「みかん」と読ませたり、橘を「たちばな」と読んでも意味は「みかん」のことと言ったように、橘はみかんを意味するようになります。

また、蜜のように甘い柑子を蜜柑(みつかん)とよび、柑子をみかんと読ませたり、柑類(こうるい)がみかん類のことだったりするのです。

つまり、橘も柑子も甘いみかんを表わすようになり、どちらかと言えば大振りのみかんを柑類といい、小蜜柑などの小振りのみかんを橘類と呼んでいます。そして、広くみかん全体を表わす言葉が必要になり、柑と橘を合体させて「柑橘」という言葉を作ったと考えられるのです。日本では、柑橘といえばみかんの仲間が主流だったので、みかんを表わす柑と橘さえあれば、柑橘全体を表わすことができたのでしょう。

ところで、最近の遺伝的な研究から、橘には中国などの柑橘にはない日本固有の遺伝子があり、日本で独自に進化した柑橘であることが分かってきました。しかも、その固有の遺伝子は、古くからある柑子(こうじ)などにも見られ、橘との間で交雑が起こっていたことも分かっています。橘と柑子が、一緒になって柑橘全体を表わすようになったのも、見えざる遺伝子の力によるのかもしれませんが。今では姿を見かけなくなった橘と柑子ですが、これからも『柑橘』という言葉の中で生き続けることでしょう。

〔参考資料〕

平井正志,光江修一,喜多景治,梶浦一郎(1990):日本におけるタチバナの分布とアイソザイム分析.園芸学雑誌.59(1)1-7

平井正志,小崎 格, 梶浦一郎(1986):アイソザイム解析によるカンキツの類縁関係の解析.育種学雑誌 36: 377-389

平井正志,梶浦一郎(1987):カンキツのアイソザイム遺伝解析.育種学雑誌 37: 377-388

田中輸一郎 日本柑橘図譜.養賢堂

安部熊之輔(1904):日本の蜜柑. 明治農学全集 果樹

愛媛県果樹園芸史(1968):愛媛県青果農業協同組合連合会

村上節太郎(1967):柑橘栽培地域の研究

岩政正男(1979):作物品種名雑考・柑橘. 農業技術 34(9)409-413

古事類苑:国際・日本文化研究センター

〔愛媛県農林水産研究所 HP 池上正彦〕